
真剣で茜に恋しなさい！

九十九迅雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で茜に恋しなさい！

【Nコード】

N5022Y

【作者名】

九十九迅雷

【あらすじ】

川神市には昔、現在の九鬼家には劣るものの、それでもそれなりの権力を持っていた名家、龍崎家があった。

その龍崎家の双子、龍崎茜と龍崎旭。2人は仲良くなった風間ファミリーの面々と楽しく穏やかな暮らしを送っていたのだが…。

彼らが12歳のときのある日、父親の株の失敗による借金が原因で龍崎家は没落する。

旭を川神鉄心に託した後、茜は何も残さずに川神市から姿を消した。茜の行方を知るものは誰も居ない。

それから月日が経った今、龍崎もとい川神旭は変わらず風間ファミリィたちと平和な日常を送ろうとしていた…。

しかし、兄の茜はもうすでに動き初めて居たのである。

注意 作者は原作未プレイの為、知識が不足しています。情報源は動画やアニメのみです。

ですので口調や設定が時々微妙になっているかも。ご了承ください。主人公はオリキャラになっています。ところどころ台本形式になります。

主人公の茜は燕が、その弟旭は百代がヒロインです。最終的にハレムにはしない予定。

第0話 茜の旅立ち（前書き）

プロローグです。
違和感あるかも。

第0話 茜の旅立ち

ここは中東の亡国である。

最近まで政権の争いが頻発しており、ついには傭兵を雇った内戦にまで発展していた。

そんなこの国の砂漠で、少年は累々と横たわる屍の真ん中に、突っ立っていた。

何処か神秘的な美しさの茜色の髪に端正な顔立ち。こんな殺伐とした光景には恐ろしく合わない美少年である。

「居たぞ！ アイツだ！」

屍たちの援軍だろうか。軍服に身を包んだ男たちが素早い動きで少年の周りを取り囲んだ。

取り囲む男たちを見回して少年はため息をついた後、一面倒くさそうな面持ちで一言だけ発する。

「……さつさと来い」

ただただその一言だけ言うと。少年はその目を閉じた。

言葉は発さなくとも「お前ら如き、目を瞑っていても勝てる」という意味の彼の挑発であった。

「舐めるなあああああ！！！！」

激昂し、殴りかかってきた男のパンチをかわし、それと同時にピンポイントに蹴りを決める。

それだけで、その動作だけで。少年の實力は圧倒的だというのがわかる。

結局、少年はすべての敵を一撃で平伏させた。

目を開けることもなく、当たった敵の攻撃は0。

「退屈。4年ぶりに日本に帰るかな？」

その少年龍崎茜。日本への帰還を気まぐれで決定する。

主人公設定（前書き）

龍崎茜&旭の紹介です。

うん、とってもシユールだ。

主人公設定

「……シベリアに直送か、今ここで死ぬかを選ばせてやる……」

【名前】 龍崎 茜 りゅうじき あかね

【身長】 178センチ

【血液型】 A型

【誕生日】 1月11日 やぎ座

【一人称】 俺

【あだ名】 アカネ アカ兄さん（旭限定）

【武器】 主に拳もしくはスペツナズナイフ（バリスティックナイフとも言う） 世界にする武器なら一応なんでも使える

【職業】 21F

【好きな食べ物】 基本食べればなんでも 松永納豆

【好きな飲み物】 飲み物と許容できるものならなんでも 強いて言えばコーヒー

【趣味】 料理 人間観察

【特技】 バイクの運転ができる

【大切なもの】 松永燕 龍崎旭 風間ファミリーのメンバー

【苦手なもの】 金全般（父親の借金で）

【尊敬する人】 スターリン

龍崎兄弟の兄。

5年前、12歳のときに父親の作った借金が原因で家が没落した過去を持つ。

その後彼は川神市を出てロシアに辿り着く。

ロシアのシベリアで1年修行をした後スペツナズの隊員になり、その後傭兵として世界を転々としていた。

武道の腕前としては、茜 > 百代の比率。
日本を出てから4年後、「退屈」というだけで再び日本に戻る。

よほどの相手でない限り本気で勝負が出来ない。

そのためいつも目を瞑って戦闘しており、それに慣れた所為で日常生活でも目を閉じて出来るらしい。

軽い戦闘狂で、サディスティックな笑顔を見せることも。

洞察力や観察力に優れていて、些細な事に気付いていることが多い。

元々性格はクール。気に入った人間や認めた人間にはちゃんと口を聞く。

燕だけは口数が他よりも増え僅かだが表情の変化も見せる。彼なりの信頼のようなものらしい。

不良を叩きのめした際松永燕と出逢う。

その後借金で負われている松永親子を助けたところから彼らの付き合いが始まる。

容姿は細めの二重の目にキメの細かい白肌。容姿は少し大人っぽいかなり整った容姿と言える。

髪はヨーロッパ人みたいなセミロング。ヘタリアのスイス見たいな髪形。色は7割が紅で3割くらい銀がメッシュになっている。目の色は青色。

声のイメージとしては宮野真守さん（ガンダム00の刹那をイメージすると良いかも）。

「アカ兄さんより弱くても、僕には僕の強みがあるんだ」

【名前】 かわかみ 川神 あさひ 旭

【身長】 176センチ

【血液型】 A型

【誕生日】 1月11日 やぎ座

【一人称】 僕

【あだ名】 アサヒ 弟（茜限定） 龍崎弟

【武器】 拳

【職業】 2 - F

【好きな食べ物】 アカ兄さんの作った料理 和菓子

【好きな飲み物】 お茶

【趣味】 読書

【特技】 速読

【大切なもの】 龍崎茜 風間ファミリーのメンバー

【苦手なもの】 金全般（父親の借金で）

【尊敬する人】 川神鉄心

龍崎兄弟の弟。旧名は龍崎 旭。

5年前の事件で兄によって川神院に預けられ、そのまま養子となる。百代のことが5年前から好き。

武道は兄と同じく才能があったようで、川神流を使う。レベルとしては 百代 旭 くらい。

兄とは違い性格はおおらかで誰にでも優しく接する。

容姿は兄とほぼ同じだが、髪の色は銀。

声のイメージは入野自由さん（イメージ的に沙慈・クロスロード）。

第1話 茜京都に立つ（前書き）

茜は見た目が中世的なイメージ。ロウきゅーぶの美星さんをもっと少し男に近づけた感じ？

それはともかく第1話です。

あと余談ですが、マジ恋Sをアマゾンで予約しました。初回限定版で8,526円まで下がっていたので。

第1話 茜京都に立つ

茜Side

あの戦闘の後、ロシア軍が極秘で出してくれた輸送ヘリに乗って日本に帰国した。

まあ「観光がしたい」って乗り合わせたロシア軍兵士が言い始めて、行き先が京都になったんだが。

そいつ等とはもう別れて、今は1人でふらついている。

ファッションなんて物に気は使っていないが、一応スニーカーとジーンズを使っている。

……上着はTシャツの上に軍服を羽織っているのだがな。

しかし、先程から妙に様々な視線を感じる。

軍服を着ていると言う理由だけならここまでひどいと言う事は無いはずだ。

三人称Side

古い町並みの中を歩く茜は、注目の的となっていた。

日光をまばゆく照り返す茜色を主にした銀メッシュ入りの髪。

細めの二重によく通った鼻筋、クリっとした青い瞳の整った容姿。

女性ですらが羨みそうなシミ一つない透き通った白肌。

そんな美少年が視線を集めるのは頷けることだったが、彼はそこまで気にしていないため、わかってはいない。

「おい、兄ちゃん」

そんな茜を気に入らないと言った様子で、彼の前には所謂不良が立ち塞がる。

さっきまで周囲から茜に向けられていた好奇の視線は同情のそれに変わる。

それを気にせず行こうとするが、不良の手が右手を掴んでそうはさせまいとしている。

茜は大きく息を吐いた。そして哀れなものを見る絶対零度のような視線をその不良に対して向け、ただ一言だけ言った。

「俺に何の用だ」

ほんの少しだけ殺気を混ぜただけの視線に不良は動揺を見せた。

「お、俺今ち、ちちよっと苛ついてんだよ。だから少し………相手してくれやあああ……！」

半ばやけくそで不良は拳を振りかぶり、殴りかかる。

だが……。

「弱いよ」

それが茜に届くことはまず、あり得なかった。茜はそれを軽々と左手で受け止めた後。

ロシアの格闘技であるコマンドサンボで鍛えられた隙の無い後ろ回し蹴りが不良の顎をピンポイントで打ちぬいた。

K1ファイターどころか現役の軍人でさえKOするようなその蹴りを喰らうのは、ひとたまりもないことだった。

ドサリ。

不良が地面に倒れ伏したのを確認すると、茜は何事も無かったかのようにその歩みを進めて行った。

「あ、君、ちょっと待って！」
そんな彼に、少女らしき声が掛けられた。
まさかその少女が今後の人生に深く関わるなど、茜はこの時知る由も無かった。

第1話 茜京都に立つ（後書き）

一応書き終えました。

茜「駄文だな。随分」

迅（作者）「ひ、ひでえ……」

茜「で、最後の少女って誰だ？」

迅「うん、君の将来のお嫁さんじゃないかな。ヒントは鳥の名前だね」

茜「顎を砕かれたいのか？」

迅「いや本当にそうする予定……ってちょっと待って、コマンドサンの構えを取らないで！？
後ろ回し蹴り打つ気満々だなオイ！」

茜「5,4……」

迅「カウントダウン！？ ああああ、と、とりあえずこの入んで失礼します！」

し、死んでたまるかあああああ……！！！！」

第2話 茜は燕に出逢った(前書き)

はい、サブタイトルからしてもうあの人しかいないです。

第2話 茜は燕に出逢った

茜Side

安い喧嘩をふっかけてきた不良をコマンドサンボの一撃必殺である
後ろ回し蹴りで叩き潰した。

……うん色々あれだ、ストレス、溜まってたんだよ……。と言っ
ても、手加減して1割程度の力だったから物足りない気はする。
つか俺に喧嘩売るならもつと強くなるか、相手を選べってんだ。

「あ、君、ちょっと待って！」

不良がピクリとも動かないのを確認した後立ち去ろうとしたのだが、
女の声で呼びとめられた。

振り向くと、白い制服（多分、川神学園の制服だと思う）に身を包
んだ女性が居た。

顔立ちは整っており、所謂美人。川神学園の制服に身を包む人間な
ら多少の武はあるだろうな。年齢は見る限り俺と同年代か1つ上く
らい。

活発そうな雰囲気を持っている………なんと言うか猫みたいな印象を
受ける人だ。

「何か？」

俺が表情を変えずに尋ねると、その女性はニッコリと綺麗な笑顔を
浮かべた。なんとなく、人を幸せにさせるような笑みである。

「今の回し蹴り、すごかったね。ちょっと話聞かせてよ」

「ん…？ 別に構いませんが」

その女性に連れられ、俺はそこらの喫茶店に入る。

その際も主に女性の視線を感じた。……軍服ってそんなに浮くのか？

「私は松永燕。あ、松永納豆の宣伝で、納豆小町って呼ばれてるよな、納豆…なんだって？ 3、4年も離れるだけでこうもわからないくなる物なのか？ 時の流れや流行り廃りは恐ろしいな。」

「俺は龍崎茜。とある事情で昨日、4年ぶりに日本に帰国したんです」

ま、親父の作った借金を手っ取り早く返済する為、海外で傭兵をしてたなんざ口が裂けても言えねえわな。少なくとも、初対面の相手には。

「何処か外国に行ったの？」

松永さんはずいとい俺の話に食いついてくる。

「うん、ロシアとかにですね」

「じゃあ、茜君がやっていたのはコマンドサンボかな」

やはり、見当はついていてみたいだ。この人、かなりの実力者の予感がする。

………なんと言うか、モモ先輩と互角にやりあえるんじゃないか？ そんな気がしてならないんだ。

「それで合ってる。何でやってるのかって、やっぱり………知りたい？」

「知りたい！」

即答ですかそうですね…。思わず苦笑してしまった。

ピキッ！

ん？ 苦笑いしただけで顎から小さな音が鳴ったぞ？ 4年も笑ってなかったっけなあ。

意外と俺は、松永さんの雰囲気から安心感を覚えているみたいだ。

「スペツナズって、知ってます？」

「ロシアの……特殊部隊みたいな集団だっけ？」

「そう、そのスペツナズです。俺は、スペツナズの元隊員だった人に特訓されました」

実際は嘘だったりする。だって俺自身がスペツナズの元隊員だもの。いや、多少の罪悪感はあるよ？ けどね、初対面の人に「ロシアの特殊部隊の元隊員です！」なんてやっぱり言えないだろ普通は。

「な、なんか君の経歴がすごく気になったよ…」

「はは、詳細はあまり言えないですけどね」

俺が珍しく軽く笑うと松永さんは少しだけ頬を染めた。というか店内の女性の視線が怖い。

そんな感じで数十分、おおよそ30分くらい松永さんとお茶していた。頼んだエスプレッソのカップももうすっかり空になっていた。その間松永さんから赤外線番号とアドレスを交換する。アドレスに英字で納豆と入っているあたり、この人の人柄が少しわかる。

…地味に今の携帯登録第1号が松永さんだ。日本に帰るからって、予め買っておいたんだよね。

うん、結構嬉しかったりする。

「あ、そろそろ売り出しに行かないといけない時間だ！」
少し慌てたような声を上げた。そっぴや納豆がなんとやら言ったたね。この人。

「納豆のですか？」

「そうだよ。あ、茜君にもあげるね！ 試食ワンカップ！」
またニツコリと笑って先輩が懐からカップを取り出す。…常に持ち歩いているのか。

「ありがとうございます。じゃあ松永さん、また縁があれば」

「燕さんでいいよん。じゃあメールしてね！」

「あ、俺の奢りで大丈夫ですよ」

松なご：燕さんにそう言っていると、手を振って去って行った。
なんというか、明るいい人だった。裏の世界で生きてきた自分には眩しい光のようで。

そんな事を思いながら、俺はレジで精算するのだった。

第2話 茜は燕に出逢った(後書き)

後書き劇場

書き終わりました。なんか、書きはじめてからキーを打つ手が止まらなくなりました。

茜「死の前兆だな」

迅「なんでだよ！ 君はそんなジョークをかましてくるな！」

茜「ま、いい兆候なんじゃない？」

迅「それよりも、燕さんといいムードだね」

茜「そうか？ 普通だろう」

迅「（普通に思う人なら30分だけであんな熱心に話した後アドレ
ス交換とかしないってば…）はあ…この子、何処で間違えたんだ？」

茜「アンタがそうしたんだろうがああああああ！！！！」 回
し蹴りを繰り返す

迅「ギヤアアアアアアアアアア」 吹っ飛んで星になる

茜「次回も期待していただけると嬉しい。ぶっちゃけ、燕さんの口
調が合ってるかどうかは俺も作者もわからないが…」

お気に入り登録してくれた人やアクセスしてくれた諸君、本当に
ありがとう。再見！^{バイバイ}」

「迅」(いや、そこはロシア語じゃなくて中国語なのかよ…)ドサッ

第3話 茜893と一騎打ち？（前書き）

頑張って更新したいです！

第3話 茜893と一騎打ち？

茜Side

喫茶店を出た後、俺はと言うとまた先程と変わらず町をふらついていた。

燕さんが良い人だったし、割と今は機嫌が良い。と言っても、表情には出さないようにしているから大抵の人間には悟られるはずもない。

さてと、退屈だからと帰ってきた日本だが、今の所俺、身寄りが無いんだよなあ……。

4年前に龍崎家リウキが没落した時、親戚も殆どがどこかに逃げて行っただし、かと言って他に迷惑を掛ける訳にも……ねえ。

仕方ねえし、観光地の京都じゃなくて、大阪辺りでビジネスホテルにでも泊まるか……？

あと、今の俺は金だけは結構持っている。傭兵で報酬をよく貰っていたし……800万から1000万円くらいは稼いでいたはずだ。

うん……？ あれは一体なんだ？

先程の喫茶店辺りとは違って、ここらは閑散としていて人通りも少ない場所のようだ。

俺の視線の先では、見る限り鍛冶屋みたいな見かけの中年の男と、一派手な色（趣味の悪い）スーツに身を包んだ5名の……所謂ヤクザが揉めていた。

「松永さん……。借金の300万、さつさと返してもらえませんかねえ？」

ん、松永？　なんか心当たりがあるんだけど。……俺の気のせいかな？

「ええつとつ、ちよつと待ってください。返す予定は今日の夜じゃありませんでしたっけ？」

松永と呼ばれたその鍛冶屋さん（仮とする）の男性は冷や汗を垂らして必死に弁明をしていた。

ふむ。この人は借金をしているのか。で、今取りたてを受けているが、時間を間違えている、とこついうことか。

「じゃかあしい！！　昼も夜も関係あらへんねん！　さつさと借りた金返さんかい！！」

うわあガラ悪……。あの鍛冶屋さんがかわいそうに思えて来た。

なんか今日はワルに関わることが多いなあ。後で塩でも撒いとくかなあ。

「ど〜もお〜！！」

若手芸人が登場してくる時みたいに飛び出してしまったが、まあ、こまけえこたあ良いんだよ！

あ、でも声が裏返ったのには軽く焦ったな。

「ん、なんやお前は？　今ワシ機嫌悪いから、しょうもないこと抜かしよつたらぶん殴るでえ」

所謂メンチを切られた。

「やってみるよ、オッサン」

ドスの利いた声を意識して挑発し、メンチを切り返す。

「ほお……。ゆうたなあクソガキ。ワシは女や子供でも容赦せえへん。……松永さあん。丁度ええわ。ワシらに逆らつとこつ言う風になるん

や。よう見ときい」

「またわかりやすいフラグを……」
俺は目を瞑ったままオッサンの繰り出した手刀ドスを引き寄せて白刃取りし、そのまま勢いを利用して投げる。

ドッサア！

屈強なオッサンが若い俺に投げられたのを見て周囲は一瞬啞然としていたが、気を取り直してその仲間たちも攻撃して来た。

……まあ弱いし、目を瞑ったまんま相手をしたよ。

何か得物を持つてる場合は無刀取りで無力化して頭突きで、相手が拳の場合は足払いや払い腰で簡単に済ませる。

正直弱すぎて暇つぶしにもならない。期待はずれだ。

「あ、あの。君？」

あ。…鍛冶屋さんのこと忘れてたな。うん。

「はい？」

「とりあえず助かったよ。ありがとう」

お礼を言っていただけなのは嬉しい…だが。

「いえいえ。まあ、一応数時間気絶するようにはしましたけど、ちょっと場所替えましょうか」

893の屍（残念ながら死んでない）を見据えつつ提案したが、鍛冶屋さんは首を縦に振り頷いた。

昼飯時な上にまだ飯も食っていなかったので、鍛冶屋さんとラーメン屋に入った。

「はっはっは！ 本当に助かったよ。ありがとうね！」

先程とは打って変わって鍛冶屋さん（名前を聞いたがやはり松永久信と名乗っていた。やはり本職は鍛冶屋らしい）が愉快的口調になっていた。

ま、こっちが素なんだろう。

「いえいえ。でもなんでまた300万円も？」

こいつがそもそもの疑問。

「いや」。株で失敗してね。それで金借りてた先が借入書をヤクザに譲渡しちゃったのよ。酷いよねえ」

ふうむ…。株ねえ。どうしても4年前の嫌な記憶がよぎるが、まあ良い。

「でも、あの様子だとまた夜頃に来るんじゃないですか？」

素朴な疑問というか、当然の指摘だったのだが…。松永さんの顔が蒼白になって行った。

お、おい…。まさかこの人…。

「忘れてた…。」

とorzな状態になる松永さん。やっぱりつか、えええ！？ 300万どうすんの！？

「うわああああ。どうしよう茜君！ おじさんまだ死にたくないよ！？」

どうやったたら初対面の少年に泣いて縋る中年男性の構図が出来上がるんだろう…。今一番の疑問だよ。

「まあ、秘策考えますから、とりあえず泣くのを止めてください」「貯金切り崩したら300万円程度、どうにかなるが…」。いくら昔のことがあって借金してる人を見逃せないつつつても、立て替えるとなると厳しいしなあ。なにか決定的な理由はないものか。

とりあえずは、その日の夜になるのを待った。

第3話 茜893と一騎打ち？（後書き）

後書き劇場

この調子で定期的に更新できるように頑張ります。

茜「まあそらそうだな。頑張れ」

迅「うん、君も燕さんの仲を頑張れ」

茜「また懲りずに言いやがる。いい加減にしやがれ」

迅「あれ？ 前までならこのへんで蹴りが来ていたはずなのに」

茜「まあ、機嫌が良いから多少は多めに見よう」

迅「真剣で！？ じゃあ親公認になれるよう頑張って！」

茜「？ とりあえずやっぱり蹴り足りないから前言撤回する…。

シベリアまで飛んでいけ」

迅「え、嘘、真剣で！？ ってぎゃあああああああああ！！」

茜「マンネリ化が早くも露呈しているぞ、おい…」

まあ、次回に期待してほしい。どうなるかはそれこそ作者次第だが」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5022y/>

真剣で茜に恋しなさい！

2011年11月24日22時48分発行